目と耳と一緒に

石井：さっき、歩くことと滑ることを同時に練習させる話が出ましたけど、私は、言葉と漢字とを一緒に覚えさせるのがよい、と考えています。元来、文字というものは、耳で聞く言葉を目でとらえるようにしたものです。だから、耳で聞く言葉と目で見る言葉……文字とを、同時に……

井深：うん、うん。

石井：同時に学習させるのが、記憶を深める道理です。これは、日本生産性本部から刊行されたものにあった記事で、アメリカの実験なんだそうですが……、耳だけである知識を……。

井深：学習する……。

石井：ええ、耳だけで学習するのと、今度は、目だけで学習するのと、もう一つ、目と耳の……。

井深：両方をね。

石井：ええ、両方から学習するのと、この 3 つの学習効果を比較してみますと、1 対 2 対 6.5 という結果が出たんだそうです。

井深：ほう。

石井：ですから、幼稚園の先生たちには、このことを特に強調することにしてるんです。と言うのは、幼稚園の先生たちは、ほとんど幼児の耳に訴えているだけなんですね。例えば、「手を洗う」という生活指導の際には、「こういう時には手を洗いましょうね」と言葉で幼児の耳に訴えるわけです。それに対して、私は、「手を洗う」と黒板に書いて、その上で「手を洗う」ことの大切な話を聞かせなさい、と言うんです。そうすれば、「手を洗う」という字を覚えるでしょう。それと同時に、その大切なことを、より一層理解し記憶して、それを生活の上に生かす、ということなんです。

井深：字を覚えたり、事柄を覚えるだけじゃなしに、日常行動に反映してきますね。

石井：そうなんです。漢字教育の先の方に、生活指導や対人関係を良くする教育、道徳教育なんかがあるんですよ。

井深：その上に、思考力とか、集中力とかいう、一般的な能力もついてくる……。

石井：そうなんです。漢字教育は、漢字を覚えることも重要ですが、それよりも、そういう能力がついてくることの方が重要だ、と言ってるんです。ところが、漢字教育反対論者は、単に漢字だけの

範囲でしか考えようとしないんです。

井深：つまり、漢字がいろんなことの牽引車になる……。

石井：ええ。その事実が重要なんです。ここがわかる園長さんは、たいてい実践してくれます。情操教育が重要だと言って、絵を描いたり、歌を歌ったりさせて、これが情操教育だと思っている幼稚園が多いのですが、漢字は微妙、繊細な心の働きを表わすために生まれたものです。だから、漢字を教えることはそのまま情操教育になるわけで、岡潔先生も「漢字は心の珠を磨く道具である」とおっしゃっているほどです。さらに、漢字を知れば、自然と読書するようになりますが、読書は、絵を描いたり歌を歌ったりするよりも、深い情操を育ててくれます。

井深：漫画じゃなしに、れっきとした本が読めるということが当たり前のことだという、そういう筋道をつけちゃう、ということなんですよね。重要なことは、漢字教育は、単に国語だけの問題じゃない。人間づくりとして、文化的な指向を与える、とそういう意味ですよね。

石井：私が指導主事をしていたころ、教育学者たちが「漢字は国語学習の上で大変な負担になっている。だから、わが国では、国語に他教科の学習時間を食われている」と言っていたものです。

井深：日本では、漢字を覚えるのに手間がかかる、と……。

石井：ええ。それで、私、外国ではどんなに国語の時間が少ないのかと思って、調べてみました。そうしたら、外国の方がどこもずっと多くて、たいてい、わが国の 2 倍くらいやっているんです。

井深：母国語教育の時間ですか。

石井：そうです。イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、ソ連、どこでも国語の時間がわが国の 2 倍以上です。例えば、ドイツでは、3 年生は 1 週間に 24 時間の授業時数がありますが、そのうちの 14 時間が国語なんです。

井深：ほう。

石井：毎日、2 時間から 3 時間、国語の学習をしている、ということですよね。結局、国語学習をうんと進めておかないことには……。

井深：どんな学習だって進められないですからね。どんな学科だって、字で表わさないものはないですからね。ああ、そりゃ面白いな。

石井：ドイツでは、理科や社会科の学習が、4 年生になるまでは 1 時

間もないんですよ。

井深：ほう……向こうではねえ。

石井：ええ。しかも、4 年生でやる理科や社会科の時間数は、決して日本より多くありません。やはり、国語の時間数が一番多いからです。国語力が強くなれば、理解力、吸収力が強くなりますから、理科や社会科の時間数は少なくてもいいんでしょうね。

井深：日本では、国語が基礎的な手段というよりも、国語イコール文学みたいな考え方だから。

石井：文学鑑賞がいけないとは申しませんが、もっと理科的、社会科的内容の文章を理解する力を養うことの方が大切だと思います。算数の文章題が解けないというのは……。

井深：ああ、応用問題のことを“文章題”って言うの、今は。ハハハハ……。

石井：算数力の不足ではなくて、国語力の不足なんです。文章が読解できないんです。何を問われているかがわからないんです。

井深：算数の問題というより、その前の国語の問題なんだな。

石井：そうなんですよ。ところで、最近、都内の小学校で、ある女の先生が……その先生は私の所の講習会に 4 年も連続して出席し、徹底的に研究された先生ですが、ぜひ石井方式漢字教育を実践したいと言って始められたんです。今、1 年生は漢字を 76 字学習することになっているんですが、この先生は、1 年生に 500 字の漢字を学習させたんです。一年たって、他の先生たちが皆言うそうです。「あの先生のクラスの子供は、朝礼で並んでいる所を一目見れぱすぐわかる。1 年生が 4 クラスあるが、見分けがつく」って。

井深：ほう！ それは鈴木チルドレンの場合もそうですねえ。キチッとしてる。

石井：ええ。きちっと整列していて、目が生き生きとしていますって。ぱっと一目見ただけでわかるそうです。

井深：結局、集中力とか、そういうものができるんだな。いや、大切なことですね。

（「幼児開発」昭和 51 年 12 月号）